

水稲新規栽培品種「あきさかり」の普及に向けた栽培技術の確立

■ 高松市、三木町の「あきさかり」栽培者 ■

(東讃農業改良普及センター 黒田栄治、間島正博、竹林真治、○池内洋)

●対象の概要

高松市及び三木町（以下、中央地区）の主食用水稲栽培面積は3,053haで、県内の総面積の約4分の1を占めている。品種は「ヒノヒカリ」や「コシヒカリ」が中心であるが、良食味の「おいでまい」や、早生品種の「はえぬき」も栽培されている。

表-1 香川県と中央地区の主食用水稲栽培面積、占有率
(単位: ha、%)

	香川県の水稲		中央地区の水稲	
		はえぬき		はえぬき
平成29年産	12,808 (100.0)	433 (100.0)	3,329 (26.0)	222 (51.3)
平成30年産	12,512 (100.0)	415 (100.0)	3,203 (25.6)	216 (52.0)
令和元年産	11,971 (100.0)	295 (100.0)	3,053 (25.5)	175 (59.3)

●課題を取り上げた理由

早生品種の「はえぬき」は、夏季の高温等の影響により品質や収量が低迷しており、栽培方法を変更してもなかなか改善されず、代替品種が求められていた。こうした中、平成29年に隣接する大川地区で「あきさかり」の試験栽培が始まったことから、当地区でも「はえぬき」に代わる品種として「あきさかり」の導入が検討されることになった。

しかし、「あきさかり」については、地区内はもとより県内における栽培データの蓄積が十分ではない状況であった。そこで、現地での試験栽培を通じて生育状況を確認・把握するとともに、得られたデータを踏まえた「栽培しおり」の作成など基準づくりに取り組む必要があった。

●普及活動の経過

1 栽培技術の向上支援

1) 「栽培しおり」の検討・作成

平成30年は、他地区のしおりを参考にして

「栽培しおり」を作成し、試験栽培を行い、令和元年には、前年の栽培結果を踏まえた中央地区独自の「栽培しおり」の作成に取り組んだ。

2) 栽培技術の向上支援と普及啓発

平成30年は、8月4日に栽培講習会を、11月15日に当年度の結果報告を兼ねた説明会を開催した。

令和元年には、栽培開始前の4月22日にカントリーの運営委員を対象に、4月26日には一般の生産者、8月19日にはカントリーの利用者に、講習会や説明会を開催した。また、全生産者のほ場に品種や田植え時期等を記載した看板を立て、周囲の生産者への啓発に努めた。

2 試験ほ等の設置

1) 標準栽培実証ほの設置等

平成30年は4か所で生育調査を、3か所で収量調査を実施した。

令和元年には、さらに詳細な調査を行うこととし、19か所で出穂期と成熟期の診断を、9か所で生育調査を、5か所で収穫物調査と土壌分析を実施した。また、他のほ場でも、生育状況の観察を行い、栽培指導を実施したほか、登熟期間の積算気温を把握するため、4か所に気温測定装置を設置した。



看板と気温測定装置の設置

2) 栽培技術の検討

栽培技術の向上を図るため、施肥改善展示ほや紋枯病防除の実証ほを設置した。

①施肥資材の検討

基肥一発肥料による施肥技術について検討するため、成分割合や溶出速度の異なる肥料で比較試験を行った。

②紋枯病防除技術の検討

中央地区では、平坦地を中心に紋枯病が多発していることから、「栽培しおり」ではイモチエースタークル粒剤を本田防除剤として使用しているが、紋枯病の防除効果がより優れるゴウケツモンスター粒剤を用いて実証試験を行った。



標準栽培実証ほの生育調査

前出荷全体では1等が31.9%、2等が60.1%であり、県平均以上の品質が確保された。

また、収量は、調査した5ほ場の平均で481kg/10aであった。

3 生産技術の検討

平成30年の展示成績に基づき、基肥一発体系は「あきさかり一発」とすることとし、紋枯病の防除剤としては「ゴウケツモンスター粒剤」を採用することとした。

4 「栽培しおり」の作成

前記の栽培調査や試験結果をもとに関係者で中央地区の状況にあった「栽培しおり」を検討し、作成した。

令和2年産 あきさかり栽培しおり

●普及活動の成果

1 「あきさかり」の作付拡大

平成30年から導入が始まり、令和元年には生産者数が65名、作付面積が約60haまで作付拡大した。

表一 中央地区の「あきさかり」栽培状況

	栽培者数	栽培面積	2等以上比率
平成30年	6	2.5ha	98.0%
令和元年	65	59.2ha	95.8%
令和2年		200ha (目標)	

また、これまでの栽培結果が良好であったことから、中央地区では令和2年から「あきさかり」を主要な栽培品種として定め、カントリーの荷受け品種を「はえぬき」や「オオセト」から「あきさかり」に変更することが決定された。

2 令和元年の「あきさかり」の生産状況

中央地区における令和元年の等級比率は1等が30.0%、2等が65.8%であった。県内の倉

●今後の普及活動の課題

1 施肥資材の検討

基肥一発肥料として、「あきさかり一発」を用いているが、登熟期間後半の肥効に不十分な点があり、これを補うための肥料の検討を行っており、今後も継続していく予定である。

2 病虫害対策技術の確立と普及

中央地区は、中山間地域を除き紋枯病が多発傾向にある地域である。さらに、最近では夏季の高温化の進展に伴い、従来発生が認められなかった地域でも発病が認められるようになってきている。

「栽培しおり」にはゴウケツモンスター粒剤を導入したところであるが、剤の変更により散布適期が早くなることから、斑点米カメムシ対策の殺虫成分の効果が劣るといった問題点を生じる。この点も考慮した防除体系の確立が、今後の課題として残されている。